

# 大久保 景造（おおくぼ・けいぞう）

## 1、プロフィール

詩人・画家。昭和 31 年2月に詩誌「アポロ」創刊（「義眼」→「あるふあ」と改題）。昭和 44 年に文化庁主催の芸術祭参加の合唱曲「五つのピエタ」（間宮芳生作曲）を作詩。

<生没>

1936(昭和 11)年8月 20 日～2006(平成 18)年 12 月3日

<代表作>

昭和 38 年 12 月 10 日あるふあ詩社発行の詩集『ぼくものがたり』・昭和 53 年9月 1日発行の詩集『冷え枯れ』自刊。

<青森との関わり>

八戸市に生まれ、八戸市に住み続けている。同人詩誌主宰・合唱曲の作詩・オペラ脚本・絵画講師等として活躍。

## 2、作家解説

昭和 11 年8月 20 日、八戸市長横町に生まれる。4～6歳まで、北村家（第3代八戸町長の北村益、長男は脚本家の北村小松）に礼儀作法を教わるため預けられる。八戸高校を卒業後、上京して半年ほど牙塾に通ったが、胸を患って3年間の闘病生活を送る。昭和 33 年7月から八戸市の繁華街でジャズ喫茶〈車門〉を経営。

昭和 31 年2月に工藤孝二・武部克己等とアポロ詩話会を結成。詩誌「アポロ」主宰。32 年7月から「義眼」と改題。33 年5月から 38 年 10 月まで「あるふあ」と改題。詩画展等も開催。33号で休刊。62 年9月に復刊し、平成3年9月通刊 49号で終刊。また 39 年6月に詩誌「くる一と」を創刊するが、1号だけである。

昭和 38 年 12 月 10 日にあるふあ詩社のあるふあ叢書1号として詩集『ぼくものがたり』を発行。「私は多くの賛成者よりも、1人の共犯者の方がほしい」と述べて

いる。53 年9月1日に自刊で詩集『冷え枯れ』を発行。一切の無駄を省いた「冷え枯れた美しさ」を求めている。

昭和 44 年に文化庁主催の芸術祭参加作品の合唱曲「五つのピエタ」(間宮芳生作曲)の作詩をする。翌年に日本ビクターよりレコード化される。テーマは是川出土品・えんぶり・墓獅子・ナニヤドヤーレである。また昭和 55 年 12 月 23 日に八戸市公会堂で上演された創作オペラ「炎の中の炎の心」の原作・脚本を執筆。

昭和 32 年にモダンアート協会展に初出品して入選。3年連続入選。36 年に創造美術会展で湯川氏賞を受賞して会友となるが、翌年に退会。その後は個展を中心に活動。故郷の萱葺きの家やえんぶり・花・壺の静物等をモチーフに、細密に描写する具象作家として活躍し、独自の世界を展開した。

昭和 46 年に八戸市文化奨励賞受賞。平成9年に岩手県遠野市文化功賞受賞。また八戸美術連盟評議員等を歴任。平成 18 年に八戸市文化賞を受賞。

### 3、資料紹介

○『ぼくものがたり』

図書

1963(昭和 38)年 12 月 10 日

265mm × 255mm

昭和 31 年に八戸市で設立されたアポロ詩話会(→あるふあ詩社)のあるふあ叢書1号である。昭和 33 年から 38 年までの作品 31 編が収められている。〈ぼくものがたりひそかによむひとありがとう〉と結ぶ。「わかれ」の1行目は〈あけがたふたりは海になる〉である。